
ラクガキ帳 不在中。

日高 マドカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラクガキ帳 不在中。

【Nコード】

N3154F

【作者名】

日高 マドカ

【あらすじ】

ラクガキ帳に描かれたのは下手くそな蟹。そこから始まるのは長く果てしない恋。そして、それは切なくも愛しい思い出

君との出会い（前書き）

先に言うと言います。
で、読むのめっちゃ大変だけど、

長編の話しなん
よろしく（・ω・）ノ

君との出会い

あの日。

君は困ったような笑顔で ノートを手渡したね。
私は

「いらない」と言っただけ、

結局このノートは私が持っている。

ねえ、真。

もし、もっと早く このノートを開いてたら、どうなった？

あの日から5年。

やっとノートを開けた。

『俺は、友菜が好きだ』

そう…書いてあったよ。

「お前、絵 下手だなー」

真は満面の笑みで、悪びれもなく言う。

そして、何かよく分からない蟹の絵を描いて、

「ほらね」

って言って去っていく。

『…上手いか…?』

蟹の絵をみつめた。

「可愛い奴め」

ボソッとつぶやいて、その背中をみつめた。

新しく買ったラクガキ帳の1ページ目、

下手くそな蟹の絵が描いてある。

何だか消すのも もったいないから残しておいた。

何か特別な思い出になるんじゃないかな…

そんな予感。

いつもと同じように流れる時の中。

1つの波紋が広がる。

揺らされてるのは、私だけ。

同じような毎日の中。

昨日と同じ日々の中。

真がいる。

「ほら、描けた」

「すげー」

目を輝かして近すぎる程に目を近付ける真。

「こっちにも描いて」

ページをめくる真。

何度もオリジナルキャラを描かされる私。

その度に嬉しそうにして、目を近付ける真。

まるで幼稚園児。

だけど、私はそれが可愛いくて

何度だって描いた。

猫っ毛を揺らし、

綺麗な目を輝かして、

天使のように笑う。

「こっちにも、こっちにも」

新しいページを開き、バンバンたたく。

5ページも それを繰り返した時に

「俺も描く」

そう言ってシャーペンを奪い描く。

だけど上手に描けなくて、

ムツとする。

首をかしげて隣りのページと見比べる。
やがて

「上手く描けない」

と言って

ノートとペンを返してきた。

「目と目の間隔が狭いんじゃない？」

「おおっ」

ひたすらに描き続ける真を、

ひたすらにみつめていた。

可愛いその姿を、優しくみつめていた。

《時が止まればいい》と

《永遠に続けばいい》と静かに思う。

手を伸ばせば君に触れられる距離。

やたらと変化を求める私達は、変化に戸惑い生きている。

目の前の生活と思い出を大切に出来ない私達は、

まだまだ子供で変化なんて受け入れられない。

だけど たまに、

それでいいから子供のままでい続けたい と願う。

「よし描けた！上手いだろっつ！」

真は、あっという間にマスターしていた。

私の次くらいに上手い絵。

ほめたら、私が必要なくなる気がして、

素直に『上手だよ』って、ほめられなかった。

私、今でも ちょっと後悔してる。

「まあまあかな」

私がそう言うのと しゅん…となる。

私はずるい子だから、真が喜ぶコトを1番に考えてあげられなかった。

「…じゃあ、またやるもん」

真は授業中も ずっと描いていた。

まっすぐな真———。

フレンド ラスト バレンタイン

「友菜、明日のバレンタインどうする？」

「とりあえず、掃除場所 同じ子にはあげようかな」

「じゃあ、私もそうしよつと」

芽生は、ふと顔をあげて言った。

「一緒につくろっ♪」

「うんっ」

友達と作るの初めてで、すぐドキドキした。

芽生のコトもすごく好きだったから、

一緒に作るの嬉しかった。

何があっても、芽生は友達…

だった。

「あーっ友菜のチョコ 生チョコじゃん！おいしそうー」

「1個どうぞwww」

「わーい」

「芽生は溶かして固めるだけ？」

「Yes！爆発したら嫌だしね」

「ふーん」

芽生がラッピングの袋を取り出す。

ピンクの下地に白のハートの袋。

とっても可愛いのと。

明らかにラッピングの力の入れようが違う箱

「…？」

首をかしげる私に気付いて、にこっと笑う。

「大本命には箱で渡さなきゃ♪」

「ああ！敬語君？」

「そうそう」

敬語は私のお隣りさんで、成績優秀，スポーツ万能，高身長と同級生。顔はイマイチで そうモテた者ではないが、芽生は敬語にLOVEなのだ

「友菜は？」

「へ？」

「本命。」

真の顔がパッと浮かんで、パッと消える。

「ないよ」

「ふーん」

芽生はラッピングされたチョコをみつめて、1つ指差した。

「コレ、真君のでしょ」

「なんで分かんのか！？」

「コレだけ、ハートものが多い」

のぞくと確かにそれだけハートチョコが多かった。

「アレー？」

「友菜さー真君が好きなんじゃない？」

「うーん」

「…じゃなくても、確実に大きな存在だと思うよ？」

芽生はいつだって優しくかったね。

芽生がいなければ、この気持ちにも気付けなかった。

「…うん。そうかも」

「頑張ろ」

芽生が優しく笑う。

芽生は

「頑張って」とは言わなかった。

「頑張ろ」って言った。

2人で頑張ろうね。って…

波乱（前書き）

バレンタイン…いいな…チョコ食べたいd（――）
チョコ30人分作りました。
関係ないですね）
（去年は

波乱

「友菜ー掃除行こーう」

「うん!! ちよっと待ってえ」

机の横にかけていた袋をとる。

中にはバレンタインチョコ。

私は教室を出ようとして、真の机に寄る。

真用のチョコを出そうとして、

ハッとした。

「え…」

真の机の端。

消しかけたような文字。

小さい文字。

どうして

「どうして芽生の名前が書いてあるの…」

誰に問うでもなく つぶやく。

出したチョコを袋にしまつて、教室を飛び出す。

悔しいわけでも、悲しいわけでもないのに、強く唇を 噛み締める。

心の奥がモヤモヤする。

掃除場所に着いて1番に見たのは、

同じクラスで

同じ掃除場所の理花が男子にチョコを渡す姿。

私もあんな風に真に渡したかった。

「友菜 遅ーい」

「…ゴメン」

私、笑顔ひきつってないかな…

袋の中、たくさんのチョコを渡す。

そして、

最後の1人に渡そうとして、気付く。

真用のチョコがある…

特に綺麗なラッピング。

せっかくだから誰かにあげよう。

私は意外な程あっさり決断した。

「ハイ。滝中君」

皆とは全く違うラッピングを見て理花が腕をひく。

「ねえ。滝中のだけ綺麗じゃん。好きなの？」

「ヤダゝ違うよお」

「えゝでもさゝ」

私の前に突如として現れたのは敬悟だった。

「…私…行くね…」

理花が小声で囁き立ち去る。

敬悟は一瞬迷って言った。

「俺にも くない？」

苦々しい笑顔。

「いいよ。ハイ」

私は、もちろん義理チョコのつもりだった。だけど

「…あゝりがと！！」

「ヤダ。そんなに嬉しいの？」

敬悟は違かった。

「うん、だって」

風が強く吹く。

「俺、友菜が好きだから」

私は幻聴かと思った。

違う。

幻聴であってほしかったんだ…

一瞬で、現実に戻される

バンッ

強くたたかれた音。

「…芽生…」

悔しそうに私を見る芽生。

「ひ…どいよ！信じてたのに」

ひどい？

信じてた？

何言ってるの。

私だって

「最悪！！アンタみたいな友達
いらなかったっつっ！！！」
痛い。

心とかじゃなくて、
もっと違うところが痛い。

目の奥がガンガンする。

あー私。

泣いてるんだ。

走り去る芽生。

「大丈夫…か？」

誰でもよかった。

真と芽生の分の穴。

これを埋めてくれる人なら、

誰でもよかった。

「うっっー」

敬悟の制服をつかむと涙が一気にあふれる。

敬悟に抱きしめられたって、

ドキドキなんかしなかったし、

真のコートを想い続けてた。

「っっー」

顔を上げると、道路側の鏡が見えた。

その鏡に滝中が映る。

なんかもう どうでも良くなって、

敬悟の腕に顔をうずめる。

広がる穴。

あふれる涙。

こみあげる感情。

止まらない。

「なあ。俺の告白って、どうなった？」

「：ちよっとだけ、ちよっとだけ、待って。

1日だけでもいいから、時間がほしいの」

「うん：」

私、どうしたいんだろう。

やりたい事もみつからず、

願いだけが強くなる。

「友菜」

「あ。理花ちゃん。おはよう。」

「おはよう」

ドンッ

芽生が私に肩をぶつけ去る。

「感じ悪うー」

理花の言葉に苦笑するしかなかった。

真の机に書かれていた芽生の名前。

消したい記憶。

見なければ良かった。

「オイ。友菜」

「：真：」

「敬悟が呼んでる」

敬悟は、下駄箱の前で　ずっと待っていたのだ
こんな朝っぱらから：

「敬悟…」

「告白の答え…」

その会話に真が割って入る。

「告ったのか敬悟!!!?」

「うん」

「そおかく」

真は嬉しそうにすれ。

なんで人の事なのに、自分の事みたいに喜べるの？

真のそういうところが…

「…」

その先を考えるのをやめる。

考えちゃダメだ。

「真。私達が付き合ったら、嬉しい？」

一瞬間をおいて、真は笑う。

「あったりまえだろ。」

友達の幸せは俺の幸せだ」

そっか…

私は敬悟の腕を引いて笑顔をむける。

「私、敬悟と付き合うんだあ」

なんだ 私。

結局。

真の笑顔が1番大切なんじゃない。

敬悟で埋められる心なんて、たかがしれてる。

そんな愛情は、長く続かなかった。

出会い、出逢い、別れ。 (前書き)

この話しの所々は、私の実話です。、、、辛い日々でした。・
(((((^ | ^ ;)

出会い、出逢い、別れ。

「理花！同クラだよお」

「嘘！？！？ヤッター」

私達は2年生になり、クラス替えが行われた。
理花と私は2組。

「敬悟も…2組なんだ…」

「…うん」

「…」

「とりあえず、並ば」

私は、そう言って理花の手を引いた。

出席番号順に並ぶと斜め前に敬悟がいた。

私と敬悟。

出席番号は1つ違い。

始業式に行くため、7組の前を通ったら、真がいた。

真と目が合ったが、すぐそらされる。

敬悟と1ヵ月付き合ったトコロで、

私は敬悟をつった。

真が理由を聞きに来たから、

『好きな人がいるの』って言ったら。

『最悪』

って言われた。

真の絵がたくさん描かれているラクガキ帳。

私と真の時間。

ラクガキ帳のページ。

あの時から動かない。

1歩も進まない。

私は、友達に会いに来た。と言って
7組に遊びに行くようになった。

友達と喋りつつ、たまに真を見てる。

「ねえ、真。竜花いる？」

そう問う私を1度見て無言で通り過ぎる。

「ちょっ！」

引き止める私に、冷たい視線。

「近付くな。…あっちいけ…」

振り払われた手。

苦しい。

辛い。

だけど、やっぱり…

カバンに入ってるラクガキ帳を取り出して、
新館の奥の階段に座り込む。

残り10ページ程度のラクガキ帳。

あとの30ページには、真の描いた絵。

それを何度も何度もめくる。

涙で濡れないように、すぎる思いで見える。

御守り代わりに　こんなノートを持ち続けて、

「馬鹿みたい」

「なにが」

自分の体がビクッと揺れる。

聞いたことのある声。

必死に誰だったか考える。

めぐりめぐる　たくさんの笑顔。

それは全て真のもの。

何も考えれない。

考えれるのは真のコトだけ。

頭の中は真っ白。

目の前の人は、

やや呼吸を乱していた。
走って追ってきたらしい。

すっかり顔を上げるタイミングを逃した私は、呆然とした。
何も考えれず放心状態

「オイ」

「ハイ！」

声と同時に顔を上げて、やっと思い出す。

「あ…滝中…」

私は内心

『どおりで思い出せないわけだ』と思った。

滝中は地味な奴で、

ぶっちゃけ記憶に残りにくい奴なのだ。

「なんでココに？」

「…コレ」

渡されたのはストラップ。

「可愛い…」

「ホワイトデー過ぎたけど」

「えっつ　そのために追いかけて来たの…!!？」

「…う…ん」

滝中は目をそらし、一瞬　沈黙をおいて
再び私を見る。

「ひどい顔…してた…から」

「へ？」

「泣きそうな顔」

「え。」

ドキッ

顔が熱い。

『心配…してくれた…とか？』

「ありがと」

「…」

「…」

話題の切り替えもせず黙りこむ。

「じゃ…」

「あのさっつ」

立ち去ろうとする滝中を止める。

まだココにいてほしい。

「こないだのテスト。どうだった!？」

「ん。あー」

キンコン

「あ。」

「予鈴鳴った。じゃあな」

「うん」

それぞれ教室に戻る。

そして ハッとする。

『ノート…忘れた…』

私の心の中。

多分、滝中でいっぱいだった。

敬悟が彼氏だった頃

全然埋められなかった

真の部分が、いっぱいになる。

不思議な感覚。

大切な君。 想えない私。 (前書き)

真…こんな性格の奴 そうそういませんよね…、、、、私の周りに
はいるんですよ (*―*)

大切な君。 想えない私。

「あー…あった あった」

昼休み

ノートを取りに来た私。

ノートをみつめ

滝中のいる5組に向かう。

「滝中…いる？」

「うん。いるよ」

滝中」

滝中は、やや距離をおいて近付く。

「何…」

「テストの順位。

結局どうだったのかなーって思って」

「ふーん」

嘘。

なんか会いたかったの。

今、真に会いたくないから、そう思うだけかもしれない。

ううん。

きつと そう。

「いつも通り。2けた上位」

「すごっ」

学年人数240人の中。

2けた上位は、決してラクじゃない。

キンコーン

「あ」

「じゃあな」

「…」

私は、それから

ずっと滝中のところに行っている。
滝中といると真のコト忘れられる。
そして、

芽生と敬悟のコトを忘れられた。
もう2人のコトを考える事はなかった。
だけど

真を忘れるコトが出来ない。
滝中と離れるとすぐ真。

真との距離が広がる程に広く深く想う。
楽しい日々で埋め尽くそうとあがく。

叫ぶ想いが輝いて、
振り切るにも思い出が。

はばたく日にも雨は降り、涙をかき消す。
私は怖かった。

いつか君の隣りに彼女が出来るコト。
イヤだった。

夢を現実と割り切って 想い途切れる遠い日待ち続ける。
だけど、

想い続けてたい。
想った先になにか想いがあるまで

真との思い出、
消えそうで消えない。

必死になって手放そうとしない。
「なあ」

「あ。ハイ」
「聞いてた」

「：うん」
ぶっちゃけ聞いてなかった。

「メアド、教えてやろうか？」
話の脈絡は全く分からない。

なんで上から目線なんだろう…
って、滝中はこういう奴か。

「うんつつ教えて！」

私さー

この時メアド教えてもらわなかったら、
どーなってたんだろー…って

いつも思う。

教えてもらわなければ良かった…とも思う。
でもね。

それはそれでイヤだなって思っちゃう。

席替え。

黒板に大きく書かれた文字。

私は何も思わなかった。

真の隣りになる可能性は、もちろん0。って、
クラス違うんだから当たり前か。

黒板に白くのびた線。

くじ引きの線の上に、人の名前が並ぶ。

先生がサラサラとくじ引きを引いて
結果を書き出す。

ぞろぞろと机を位置へ運び始める。

私は席を1つだけ後ろへ移動させた。
すると、

斜め前の席だった敬悟が2つ下がる。

え？

ガタッ

わざわざ大きな音をたてて座る。

私の隣りに。

「え…」

前の黒板に書き出された席順。

私の隣りは…敬悟だ…

「うそ」

敬悟はじろりと睨んで私に背を向けた。

「どうしよう滝中…」

「知らんわボケ」

内容を聞かずして見放される。

滝中は いつもそうだ。

人の事なんかどうでもいい って

すぐ見放す。

そのクセ

ギリギリのところになると

すぐ助ける。

私はコイツを

『ツンデレ王子』と呼ぶ。(心の中で)

「お前、次移動だろ？いいのか？」

「いいもん」

次は2組から特に遠い別館の最上階のコンピューター室。

10分の放課で足りるか足りないかの遠い距離。

「ねえ…ホントどうしよう。」

元カレの隣りの席になっちゃった」

「興味ねえっつの」

滝中のいつも通りの冷たい言葉。

今日は、やけに心に突き刺さる。

「真なら………って言ってくれるのに」

「ハ？聞こえねーぞ」

滝中の言葉にハッと我にかえる。

「私、もう行くね!」

廊下を走り抜けて、階段を駆け上がる。

私。

さっきなんて言った?

どうして、あんな事言ったの。

無意識でつぶやいたアノ言葉。

『真なら……って言ってくれるのに』

私、無意識のうちに真と滝中を比べてた……?
足を止める。

小声すぎて

自分でも聞こえなかった。

真なら……って……

真なら、

なんて言ってくれると思ったの?

なんにも……なんにも言ってくれないんじゃないの?
でも……でも、きつと。

優しく頭を撫でてくれたんじゃない?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3154f/>

ラクガキ帳 不在中。

2010年10月28日04時25分発行